

## 中国、エコ・カー時代の到来

Business News

### ■今、電気自動車が熱い

新聞報道によると、今年の東京モーターショーは世界不況のあおりと日本市場の地盤低下等の影響により、参加を辞退する海外メーカーも多く、特に目新しい要素も少ない模様とのことだが、ハイブリッドや電気自動車といったエコ・カーに関する話題が中心となったことは予測通りであった。

その会場において、日産のカルロス・ゴーン社長は「ゼロ・エミッション時代の到来」を告げ、電気自動車の開発方針を明らかにした。ゼロ・エミッションとは、排出物ゼロにするという意味である。CO<sub>2</sub>や騒音を排出する自動車は地球温暖化の原因として大きなウエイトを占める。また、自動車の燃料である石油資源の埋蔵量にも限界がある。そこでゼロ・エミッションの達成のため、CO<sub>2</sub>や騒音を出さない電気自動車が脚光を浴びているわけである。ガソリン等の化石燃料は近い将来に枯渇することが予測されており、内燃機関に依存した時代はやがて終焉を迎えることになるだろう。将来のエネルギー事情の確保のため、太陽光発電や燃料電池などの代替エネルギーの研究が進んでいるが、そのような中で、電気自動車はゼロ・エミッション時代の切り札として注目を浴びている。

### ■急成長する中国メーカー

現在のところ、自動車市場は欧米や日本のメーカーが中心である。しかし、最近、急速に力をつけてきているのが中国の自動車メーカーである。急速なモータリゼーションの発展が続く中国では、09年度の新車販売台数が世界一になる公算が高い。

エコ・カーの分野でも、比亞迪股份有限公司の子会社である広東省の比亞迪汽車(BYD)では、家庭用コンセントによる充電とガソリンのハイブリッド対応車F3DMを昨年12月から販売している。親会社の比亞迪は世界のカドミウム電池の30%、リチウムイオン携帯バッテリーの65%を生産する大手電池メーカーで、こ

の電池技術がハイブリッドカーの開発の基礎技術を担っているようだ。また、安徽省の奇瑞汽車は、家庭用コンセントで充電可能なプラグイン電気自動車を発売予定であり、その性能としてフル充電には約6時間かかるが、最高速度は120kmと申し分なく、フル充電で150kmの走行が可能という。

### ■電気自動車が庶民の足に

山東省聊城市では、市街地で公道を悠然と走行する小型電気自動車が多く見かけられる。しかも、これらの小型電気自動車は、正規のナンバープレートを付けておらず、中国の道路交通法からすれば明らかに法律違反であるはずだが、現地では電気自動車に関する法令がなく放置されているという。国家的には問題視されており早晩の対策が打ち出されると思われるが、同市の副市長は、電気自動車による産業振興のため、農民に購入を奨励しているという。この違法電気自動車は自動車税等の対象にならないだけでなく、1台2万元(約26万円)という低価格もあり、地元民にとっては手軽な乗り物として受け入れられているようだ。

山東省では山東時風グループを始め20社以上の電気自動車メーカーがあり、その生産台数は年間10万台にも及ぶという。電気自動車はモータと電池というシンプルな構造でできているため新規参入が容易という事情はあるが、山東省自動車協会によれば、こうした小型電気自動車はどれ一つとして自動車品質基準の合格レベルに達しているものはないということである。しかし、こうしたメーカーの中から将来的にBYDや奇瑞汽車のように成長する企業が出てくる可能性は高いと見られている。

エコ・カー開発については、中国政府も石油依存が政策上の弱点と考えており、石油輸入量の削減にむけて電気自動車産業の振興に大きな期待を寄せている。10月20日には、今年の自動車生産台数が1000万台の大台を突破した中国、日本の自動車業界にも脅威となる日は近いように感じられる。